

TOKYO2020 にスタッフとして参加して

平成6年卒 渡邊 撰

[序]

この夏、53年ぶりに東京で開催されたオリンピック、そしてパラリンピック。そのスタッフの一員として、小生も多くの三田漕諸兄と共に参加させていただきましたところ、河合理事長より、「無観客開催となり、現場体験者の経験の貴重さはむしろ増した。見聞したことを寄稿して三田漕会員と情報共有する様に」とのお話をいただきまして、以下に雑駁ながら感じたことを記しました。ご高覧賜れば幸いです。

[構成]

- 1、オリパラスタッフとなるまでの経緯
- 2、コロナ禍中のオリパラ
- 3、オリパラ選手らから感じたこと
- 4、TOKYO2020 のレガシー

1、オリパラスタッフとなるまでの経緯

小生は高校(塾高)、大学、社会人(トヨタ自動車)と漕歴を重ねましたが、“選手としてオリンピックに出たい”という夢を叶えるには努力が足りず、1999年にシドニー五輪へ向けた日本代表デベロップメントチーム一次選考を通過するのが精一杯でした。

社会人チーム引退後は、駐在先や国内の地域クラブに所属し、趣味でレース出漕・観戦をしていたのですが、2013年IOC総会で東京五輪開催が決まった際に、“夢よ、もう一度!”と現役復帰を決意しました・・・ということは勿論なく、どこかの国の事前合宿ボランティアでもよいから、五輪 rowing に関わる体験をしたいと思い、密かに作戦を練り始めました。

まずは、テスト大会として海の森競技場で実施される2019年の世界ジュニア選手権に、“強豪国とのコネを作る”という野心を頂きつつボランティアとして参加。各国チームとのコネづくりは狙い通りにはいきま



んでしたが、ささやかな英会話スキルを買われて、World Rowing (世界漕艇連盟) が配信するレース動画のカメラトラックのドライバーに抜擢をいただき、(現場で気付いたことを提案したり等の)働きぶりがそれなりに評価されたのか?“翌年のオリパラで同じ業務のスタッフへ推薦する=五輪内定”という具合にコトが運びました(やったぜ!)これで、当選したチケットを使わずに、全レースを真横で観戦出来ると喜び勇んで、早速、勤務先に「オリパラ期間中に自己研鑽休暇(いわゆるサヴァティカル休暇)を取得する」旨を申請しました。

2. コロナ禍中のオリパラ

ほどなくして、大会組織委員会（事務局は大手広告代理店）から正式依頼があり、開催を心待ちにする日々がしばらく続きました。しかし、“こんな上手くいくほど、世の中は甘くないのではないだろうか” そんな不安があったのも事実です。

その予感は的中してしまいます。そう、誰もが予想しなかった新型コロナウイルスの世界的大流行です。2020年3月に東京大会の1年延期が決まりましたが、その際にも事務局から連絡は無く、さらにその後1年以上も音沙汰がなかったのは精神的に大変こたえました。（小生のごとき内定スタッフですらそんな心理状態ですから、出場が決まっていた選手や選考会を控えた選手の辛さはさぞかし、と思います）

五輪開幕まで一カ月を切り、“このスタッフ業務も立ち消えか・・・”と諦めかけたタイミングに事務局から業務依頼の連絡。大慌てで休暇中の業務調整を開始しましたが、コロナ第5波の勢いは日を追うごとに増すばかり。聖火リレーも一部では中止、観客も海外入国はNG、次いで国内からでも50%制限、ついには無観客となっていき、“本当に開催されるのだろうか”と半信半疑のまま開会式の数日前に指定の宿泊先へ入りました。本当に開催が確信出来たのは、開会式前日にサッカーの予選が始まったのをテレビで観た瞬間でした！

「この状況でも開催を強行するのか！」という報道の止まぬまま、また、競技と関係ない準備のゴタゴタも発生するなかの開幕でしたが、海の森の現場では、「このような困難な状況にこそオリンピック精神を発揮して、スポーツを通じた世界の紐帯を見せるべきときだ！」と士気がむしろ昂り、競技役員、場内警備員、警察、消防、自衛隊、ライフセーバー、国際映像チームといった会場に居る人々全てに強固な連帯感が生まれ、“すれ違うときは10m先から挨拶する”という、中学生の部活動？さながらの光景が日常となっております。

また、熱中症のようなコロナ発症が疑われる症状は、ただでさえ大変な医療現場にさらなる負荷をかけてしまうので、心配された通りの猛暑の中で、スタッフ自身も健康状態を保ち、コロナ感染リスクを下げる行動に徹して過ごしました。（その結果、仕事の無いときに引きこもっていた宿泊先の部屋でちょこちょこ飲み食いしてしまい、五輪期間だけで5kgの体重増に成功しました）

3. オリパラ選手らから感じたこと

1年間の延期、入国制限に伴う事前合宿の短縮など、選手らはコンディショニングが大変だったと思いますが、それでも随所に醸し出される“流石はオリンピック・パラリンピック”という雰囲気や堪能することが出来ました。小生が特に強く印象付けられたのは以下の3点です。

- ①強豪国のレースへ向けた準備の凄み
- ②オリンピックの清々しさ
- ③パラリンピックの神々しさ

以下に、具体的に記します。

まず【①強豪国のレースへ向けた準備の凄み】ですが、いわゆる強豪国は、予選レース前日、そして準決勝・決勝のレース前日でも、レースペースでの練習をガンガン行っていました。その中でも中国女子の各クルーは、海の森のコースを何周回も重ねていて強度・量ともに多く、クルーが常に何か（ちょっとした艇の挙動やフォーカスしている動きの確認らしい）を叫びながら乗艇している姿からは、勝利への渴望と気迫を感じました。中国女子4Xは、決勝で2位以下を5秒も引き離しチャンピオンになりましたが、決勝前々日も1500mのレースペースを数セット実施し、しかもそのインターバルに（つまりは心拍数が高い状態で）両舷でキャッチ周りのドリルを丁寧に実施しており、その姿を目撃した際の衝撃は今も生々しく、小生にとって“五輪で頂点に立つクルーの象徴”となっています。徹底した技術ドリルとレースペースの実施は、メダル獲得を目指す強豪国に共通しておりましたが、中国を除くアジア勢やアフリカ勢は、会場入りしてからは“極力疲労を残さない”といった様子に見受けられ、レース直前の乗艇内容の質量両面の違いから、“通常時のトレーニング量自体に大きな違いが有るのだろう”と推察しました。（五輪後、中国の lead coach 兼 技術ダイレクターの Steve Redgrave 卿が“ハードワークが中国にメダルをもたらした”と語る記事を見つけ、大いに納得しました）

次に【②オリンピックの清々しさ】について記します。

上述した様に、TOKYO2020へ至る道は自力でコントロールできない障害が多く、特に欧米勢は時差や日本の夏の気候への対応計画の変更を余儀なくされて臨んだ五輪になったと聞いていましたが、アスリート達がそんなことを表に出さずに戦い、レース後に会場内外で互いに称えあう姿、さらには、大会関係者への謝辞を発信してくれた姿勢には深く感銘を受けました。

ご覧になられた方も多いと思いますが、悲願の五輪メダルが金となった、女子シングルスカルの Ema Twigg 選手(NZ)を、2位と3位の選手が担ぎ上げて勝利を称えている姿は、全競技を通じてもTOKYO2020大会の歴史に残る名シーンだと思います。（表彰式では、ディスタンスを取っているとき以外はマスク着用がルールでしたが、彼女らの行為を咎める雰囲気は、あの場に全く有りませんでした！）



また、五輪という舞台が、世界一を決める大会“であると同時に、“全てのオリンピックがヒーローであり、ヒロインである”ということも、選手個々人のプロフィールを調べ上げて解説してくれる会場解説者のお陰で知り得ることが出来ました。列挙するには紙幅が不足なのが残念ですが、直前まで看護師として医療の最前線でコロナ流行と戦いながら東京へやってきた、シンガポールの Joan Poh 選手、



長く続いた内戦からの復興途上にあり、女性がスポーツをすることへの社会的な理解が低いスーダンから参加のモハメド選手(スーダンからの五輪参加は全競技で 5 名、うち女性は彼女を含め 2 名)らの力漕する姿に“スポーツの本質的な価値”を見た思いでした。

三つ目は【③パラリンピアン神々しさ】についてです。“神々しい”との表現は、海の森のとあるスタッフが発したのですが、まさしくその通りだと感じました。

オリンピックに比べると、パラリンピアンは雰囲気“和やかで取っ付き易い方が多い印象でしたが、その柔和な笑顔の裏側にある、“無いものを嘆くのではなく、有るものを活かす”、“障がいの種類も程度も違うので、トレーニング方法や用具も自分で工夫して考える”、“自分だけでは出来ないことが有ることを受け入れたうえで、自力で出来ることを探る”、“障がいと一生付き合っていくものという現実と折り合いをつけている”といったお話は本当に奥深いもので、彼らがより生き生きと活躍できる競技環境が実現して欲しい、それは、ただ“15%”の障がい者のみならず、全ての人々にとっても良い社会なのだ、ということを感じました。

パラローイングには、日本は混合 4 +、女子 1 x の 2 種目に出場していましたが、選手らが“もっと競技仲間が欲しい”と異口同音に話されるのを承ってしまったので、“私の活動水域へのパラローイング導入”は、小生のライフタスクになりました。



4. TOKYO2020 のレガシー

最後に、小生の考える“TOKYO2020 のレガシー”を記して、この小文を結びたいと思います。

運営面においては、“海の森水上競技場という国際規格のコースが整備された”、そして、“オリンピック、パラリンピックという、これまた世界最高の（故に最高難度の）国際大会を開催した”、という実績が、ハード・ソフト両面で絶大なレガシーとなったことに疑う余地は有りません。施設、水路、審判、広報、医務、など多数のセクションで全国から馳せ参じた大勢の艇友らが活躍していました。（その中に、三田漕メンバーが数多く居たことは、塾端艇部出身者として誇らしいものでした）

小生が参加した『会場エンターテイメント』部門も、“レースの見どころや選手の魅力を分りやすく伝える”、“音楽や映像で会場全体が楽しめる雰囲気を作る”ことを通じて、“ローイング・ファン作り”に寄与し、ひいては将来の代表強化に繋がっていく活動として、欧米強豪国や World Rowing 主催大会ではデフォルトだそうです。今回は、残念ながら無観客のためにダイレクトな反響はわかりませんでした。周辺住民への気遣いが不要＝大音響も大歓声も制約が無い海の森で、その様な光景が繰り広げられる日が今から楽しみです。

また、World Rowing から各セクションの責任者が派遣されており、彼らに“観客も含めた全参加者が楽しめるスポーツイベントとしての Rowing”の運営を学べたこと、彼らと強力なコネクションを構築できたことも、大変意義深いものだったと思います。この関係の維持・発展と国内におけるスキル継承、そして日本代表の強化のために、今後も世界選手権（年代別大会でも良い）やアジア選手権を日本へ招致していくべきだと思いますし、国内大会も海の森での実施を通じて“世界とのレベルとの差を測る場”として行けば良いと思います。（今年の全日本・インカレでも改めて感じましたが、6 艇レースは迫力が有り、観客にとっても最高にエキサイティングです！）

また、強豪国が実施した事前キャンプへの支援活動を通じ、各受入れ地に強豪国の考え方や取り組み方が貴重なノウハウとして残されたと聞かれています。そのノウハウを国内各チームで共有すれば、新たな刺激となって、国内の競技レベルが向上されていくことでしょう。それは 3 年後のパリ、更にはロサンゼルスへ続く道でもあり、そこで日本代表が今回以上の活躍をしてくれたときに、“TOKYO2020 大会のレガシーが真に活かされた”、と言えるものと思います。小生も、愛知県の水辺から世界に羽ばたいて行く選手が育つことを夢見ながら、今後も精進して参りたいと思います。

以上